



社団法人日本フードサービス協会 [JFニュースレター 2011. 7. 20]

牛肉の放射性セシウム汚染問題への対応

牛肉の出荷停止と検査体制の整備方針が明らかとなる。

牛肉を食べても健康への過度の心配は不要である。

会員企業は、情報提供に当たっては適切な対応を！

1. 福島県産の牛の肉から基準を超える放射性セシウムの検出が相次いでいます。政府は7月19日（火）、「福島県において飼養されている牛の出荷停止」を指示しました。また、出荷停止の解除方法も示され、計画的避難区域等では全頭検査、それ以外の地域では全戸検査が行われることとなりました。

この体制により、当面福島県産の牛肉は市場には出回らなくなり、市場に流通する牛肉の安全が確保されることとなります。また、出荷停止の解除は安全を確認のうえ実施されます。

2. 一方、規制値を超える稲わらを給与した畜産農家から出荷された牛の肉について、消費者ならびにデベロッパーや百貨店などからは、外食等の事業者に対し、個体識別番号に基づき自ら公表すべきとの要請が多数寄せられています。

3. しかしながら、牛のトレーサビリティ制度は、食品事故に際して原因の究明と被害の拡大防止を図ることに、その本旨があるのであり、末端の外食事業者に責任を負わせるような運用は避けるべきです。

協会としては、政府に対し、①牛肉のセシウム汚染の検査・出荷停止体制を確立し、市場に出回る牛肉は規制値以下という状態を早急に作り、②仮に規制値を上回る牛肉を食べていたとしても健康上問題になるものではないことを、農水・厚労大臣の記者会見等で説明し、消費者や事業者の不安を払拭すべきであると求めているところです。

4. 会員企業におかれては、このような状況を踏まえ、ホームページ等での情報の掲載に当たっては次の事項にご留意願います。

- 1) 牛肉取り扱いの情報については、科学的根拠に基づきわかりやすく、消費者の不安を募らせることのないように留意して、明らかにすること。
- 2) 仮に放射性セシウムが規制値を上回る牛肉を取り扱ったとしても、その責はフードチェーンの川上に求められるべきであること。
- 3) また、これまでに明らかにされた牛肉の放射性セシウムの線量は、自然界において浴びる線量に比べても極めて低く、健康への影響は問題がないこと。

(参考) 放射性物質を含む稲わらを給与された牛の肉を食べた場合の影響
(食品安全委員会のウェブサイトに掲載された試算に基づく)

放射性セシウムが、暫定規制値である 500 ベクレル検出された牛肉を 1kg 食べた場合の人体への影響は、0.008 ミリシーベルトとなる。

これは、自然放射性物質の摂取による年間実行線量（日本平均 0.4 ミリシーベルト程度）の約 50 分の 1 である。

過日福島県南相馬市の農家から出荷された牛の肉から、最大 4,350 ベクレルの放射性セシウムが検出されたが（暫定規制値の 8.7 倍）、この牛肉を 1kg 食べた場合の人体への影響は、0.07 ミリシーベルトとなる。

飲食に由来する放射性セシウムの摂取制限の実行線量は、年間 5 ミリシーベルトであるが、1kg の汚染された牛肉を 1 年間繰り返し食べ続けることは考えにくいことから、人体への影響は極めて低いと考えられる。

※この件のお問い合わせは事務局：関川・中井・本橋までお願い致します。

以上